毒麦がまかれた世界で生きる

マタイ13章24～33節
2022年2月13日
松田 基子 師

私たちは現在、礼拝用の賛美歌に、賛美歌 21 を使っていますが、それまで使用した賛美歌90番に、“ ここも神の御国なれば ”があります。 3番の歌詞を読みますと、

“ここも神の御国なれば、よこしま暫(しば)しは時を得(う)とも、主のみむねのややに成りて、あめつち遂には一つとならん”

とあります。 ここに歌われていますように、この世界は、神様がお造りになった、神の御国なのですが、罪に染まった人間が生かされているために、罪や、悪が満ちています。 そのような世界に置かれている教会は、イエス・キリストを信じ、キリストに倣う生き方を求めて、天の国を映し出すべき所なのですが、教会もまた、不完全で、過ちを犯してしまうことから、免(まぬか)れる事は出来ません。

現実に、様々な問題が起こって来る中で、私たちは、どの様に生きていったら良いのでしょうか。 イエス様は、マタイ13章24節から、1つの譬え(たとえ)を通して、この世の現実を、お示しになりました。

「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた」

と記されています。 私たちは天の国と言いますと、この現実の世界と言うよりも、文字通りの、天の国を思い描くのですが、ここで言われている天の国は、賛美歌90番に歌われています、

“よこしま暫(しば)し、時を得ている”

と言う現実の世界です。 譬えでは或る人が、良い種を畑、即ち、この世界に蒔いたのです。 或る人と言うのは、27節に、人の子、即ち、イエス様であると説明されています。

イエス様はどんな種を蒔かれたのでしょうか。ところで、聖書のメッセージは、神様は、この世界に対して、決して無関心ではおられず、常に心を用いておられることを語っています。 創世記1章には、神様による、天地創造が記されていますが、1章31節に、

「神はお造りになった全てのものを御覧になった。 見よ、それは極めて良かった」

と記されています。 つまり、全被造物は、人間も含めて、聖であり、善である神様の傑作であって、悪い所が全く無い、完全なものであったと言うことです。

その完全無垢な世界を、神様は愛を込めて、人間に管理を託されました。 ところが人間は神様と人間の間を裂いて、神様に敵対させようとする、誘惑者の、神様を疑わせる言葉に惹かれて、神様を疑い、神様からの禁止命令を破り、神様に背いてしまいました。 聖書は、神様に敵対して、人間を神様に背かせ、自分の配下に置いて、自分の勢力を広げる存在を、サタン、悪魔と表現しています。

サタンとは人間を神様の愛、御心に背かせる勢力のことです。 サタンは、人間が自分の思い通りに生きて、自分を神とする、自己中心の生き方をするようにと誘い、人間はそれに従いました。結果、世界は人間を罪に誘惑するサタンの闊歩する所となり、世界は罪と悪の蔓延するところとなりました。 それは、人間自身が選び取った道です。 しかし、それはサタンと共に、永遠の滅びに向かう道でした。

一方、神様は、人間が、ご自身の愛を裏切り、背いたにも拘わらず、人間の造り主としての愛を捨てることが、お出来になりませんでした。
そのために、同じ愛で人類を愛しておられる神の御子を、人類の罪の贖いのために、人の子として、この世に誕生させられました。 神様はこの世界を見捨てるどころか、何としてでも、救いたい、神様の御心による、真の神の国を建て上げたい、との願いを持たれたのでした。

そのために、この世に、人となって生まれてくださったのが、イエス様です。 イエス様は、神様から、人類の贖い主、メシアとしての使命を与えられて、天の国の福音を宣べ伝えられました。

イエス様が教えられた、**神様の真の御心**とは、人間が**神様の愛**を知り、その愛で、人間同士も愛し合い、人を人として尊び、被造物を大切にする、神様の**愛に依る世界**を**築いていく**ことでした。 イエス様の宣教は、そこに立っていました。 イエス様は、当時の律法社会から、排除された人々、律法を守れなくて、罪人と呼ばれた、徴税人、遊女、日雇い労働者、病人、身体の不自由な人など、社会から人間として尊ばれなかった人々との交わりを求め、彼らの友となり、親しく交わり、神様が、その一人ひとりを、かけがえのない愛を注いで、見守っておられる事を教えられました。

イエス様は、教えられたばかりでなく、その愛を、注がれました。 この様にして、イエス様は天から降って来られ、**天の国の本物の愛**、正真正銘、天の国の種を、**地上に蒔かれた**のです。 そのイエス様の働きに、サタンがじっとしている筈がありません。 13章25節に、

「**人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った**」

と有ります。

「**人々が眠っている間**」に、

とあります。 人間は眠るものですが、霊的にも人間は眠ります。 つまり、神様にも、イエス様にも心を向けないで、**この世に対する思い**、考えに**支配されてしまう**のです。 サタンはそう言う隙を狙ってきて、毒麦の種を蒔き散らして、自分たちの考えに引き寄せ、神様の愛、イエス様の愛を疑わせ、その教えに疑問を抱かせ、神様から引き離します。 そして、人と人とが信頼し合えない、敵対関係に誘うのです。 そのようにして毒麦を実らせていきます。

人間は、心の思い、考えが、行動として、実を結んで行きます。 26節に、記されていますように、

「**芽がでて、実って見ると、毒麦も現れた**」

と記されています。 毒麦と言うのは、イスラエルが位置する、パレスチナ地方には、よく見られたのだそうです。 雑草の一種で、小麦と良く似ていて、穂が出る前は、小麦と区別が付け難いのだそうです。 でも、収穫の頃になると、その違いが明らかになります。 農夫は、はっきり選り分けられるのですが、素人には分からず、食べてしまいますと、嘔吐や下痢を起こすのだそうです。 そこから、毒麦と呼ばれていたそうです。 サタンは人間の自己中心に働きかけて、その考えを毒麦に実らせていきます。

実際の畑に、毒麦が出て来ると、それを管理している僕は、それに気付いて、主人にそのことを報告します。 27節に、

「**だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。 どこから、毒麦は入ったのでしょう。**」

僕にしてみれば、主人の命令に従って、怠り無く、管理してきたつもりなのに、どこにその種が紛れ込んでいたのだろうかと、不思議でなりません。 すると主人は、既に、予測していた事のように、

「**敵の仕業だ**」

と答えました。 僕達は、納得したようです。

「**では、行って抜き集めておきましょうか**」

と尋ねますと、主人は、29節で、

「**いや、毒麦を集める時、麦まで一緒に抜くかも知れない。 刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。 刈り入れの時、『先ず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と刈り取る者に言いつけよう**」

と答えています。

僕達にしてみれば、主人の答えは意外でした。 毒麦だと分かっているのに、

『抜かないで、そのままにして置くように』

との指示です。 なぜなら、地中に根を張った毒麦は強く、良い麦の根に絡まっているかも知れません。 それを抜けば、良い麦まで抜いてしまうことになるからです。 イエス様はこの喩え話しを、弟子達に向かって語っておられます。 イエス様は、地上での、ご自身の使命が、

『真のメシアとして、苦難の僕となって、人間の罪を引き受け、十字架に架かって、人間の罪を贖う事にある』

と言うことを自覚しておられました。

神様はそこに、天の国を開き、人間を招いてくださるのです。 これこそ福音です。 イエス様が天に帰られた後、このイエス様の十字架の贖いに依る、救いの福音を、蒔いて行くのは、イエス様に続く弟子達です。 しかし、彼らが、イエス様の福音を携えて行く、畑である世界は、サタンに依って福音を妨害する、毒麦が蒔かれているところでもあります。 イエス様の心配は、巧妙な敵は、教会の中にも、毒麦の種を蒔く事です。 実際に、初代教会には、ユダヤ教からキリスト者になった人々と、異邦人キリスト者がいましたが、双方、育った宗教的環境の違い、価値観の違いがあり、互いが、互いを、自分の立場から断罪し合うということが起こりました。

その時、人間的な正義感に立って、先走って、
「**あなたは毒麦だ**」
と断罪して、排除してはならないと言われているのです。 イエス様は山上の説教で、マタイ7章1節に、
「**人を裁くな、あなたがたも裁かれないようにするためである**」
と命じられました。 人間はイエス様の弟子であっても、相手を断罪する資格は、与えられてはいません。 神様の愛から離れた、罪ある行動に対しては、
「それは罪だ」
と指摘する事はできても、その存在を、
「『毒麦だ』 と**断罪**して、**排除**するとは、**人間には許されていない**」
のです。

人間は変わる可能性が有るのです。 良い種が蒔かれ、良く成長しているかに見えて、それこそ霊的な居眠りに陥って、毒麦になる事もあります。 反対に、
「あれは毒麦だ」
と、こちらの判断で決めつけていた人が、イエス様に真剣に向き合って行く人に、変えられることもあるのです。 では、その人の人生の判定はどこで決まるのでしょうか。 刈り入れの時、つまり、イエス・キリストの再臨によって、主ご自身が、審判を下される時に決まるのです。

イエス様は、13章41節で、
『天使たちを刈り入れ人として、遣わす』
と、言っておられます。 それまでは、人間に変わる時間が与えられているのです。 人は変わります。 **変えられる可能性**に**満ちて**います。
パウロがそうでした。 イエス様が神の子の命を賭けて、ご自身を信じる者に、天の国の、命の種をお与えになったのに、パウロは自分の思い込みから、
『キリスト者を撲滅する事こそ、神様に喜ばれることだと思って、キリスト者を迫害したのでした。』
彼自身は、自分は正しい事をしていると思っていましたが、真に彼こそ毒麦でした。 そのパウロが、天に帰られたイエス様に、その名を呼ばれ、真理を悟った時、彼の心にキリストの種が蒔かれて、見事な麦に成長したのです。

そのパウロが、コリントⅠ、4章5節で、
「**主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。 主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。 そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります**」
と言っています。 どんな生き方をすれば良いのでしょう。 パウロは、その時、つまり、
『イエス・キリストの再臨、審判において、お褒めに与ります』
と言っています。 このように言えるということは、彼は、
『人間的な判断をすることなく、神様の前に真実に生きて、神様に委ねて生きた』
と言うことでしょう。
イエス様も、弟子達がそのように、互いを尊重し、尊敬し合って、天の国を望み見て、福音の種を蒔いていくことを願っておられました。
それはやがて、世界を覆うほどに成長するのです。 イエス様が、天の位から降りて、罪に満ちたこの世界に、人の子として誕生され、人類の罪を負い、身代わりの十字架に架かって、人類

を贖い、人類に天国への救いの道を、開かれた時、この福音を信じた者は、弟子達を初め、一握りの者しかいませんでした。 しかし、イエス・キリスト、神の子、救い主の福音は、そこから、全世界に広がって行きました。

イエス様は、その事を、からし種とパン種に譬えて語っておられます。 マタイ13章31節に、

「イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。 天の国はからし種に似ている。 人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」

と言われました。 ここで、空の鳥を、岩波訳では、

「天の小鳥たち」

と訳されていて、**異邦人の国々**を、象徴しているとされます。 イエス様に依って、もたらされた天の国は、地上での、その始まりは、からし種の様で、それは、芥子(ケシ)粒程の物ですが、からし種は、成長すると、3～4メートルの木に成長して、小鳥が巣を作るほど、しっかりした木になるそうです。 その様にイエス様に依る、命の種の福音は、

『確かな安息を与え、イスラエルばかりでなく、**異邦人の世界**にも**広がっていく**』

との約束です。

13章33節には、

「天の国はパン種に似ている。 女がこれを取って、3サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる」

と言われました。 一握りのパン種で、約40リットルもの粉を、膨らませることが出来ると言うのです。 そのように福音は**全世界に広がって行く**との約束です。 イエス様がおられるところ、そこが天の国です。 地上には、よこしま(正しくないこと)が満ち、天の国を表すべき教会も、尚、不完全で、時に、毒麦が芽を出す事がありますが、神の御子のイエス様が、十字架に架かって、贖いだして下さった教会は、また、イエス様が修復して下さり、イエス様ご自身が、教会を天国の門として下さっているのです。

私たちはその教会に、連なっている事の大きな恵を自覚して、イエス様に繋がり、イエス様の命の種に生かされ、イエス様の福音の種を蒔きつつ、天の国への、旅路を続けて参りましょう。

お祈りをいたします。
憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は、罪深い私たちを救い、天の国に迎えるために、御子イエス様をお与えになりました。 イエス様は十字架の贖いを成し遂げ、天の国の門を開き、その入口を教会に置かれました。

私たちには、天の国の福音の種を蒔く使命が与えられていますのに、時に、私たち自身が、毒麦になって、福音を妨げる罪を、お許しください。

こんな私たちを、聖霊が導いて、麦に変えて下さる事を感謝いたします。

私たちは、毒麦が蒔かれた世界に置かれていますが、イエス・キリストの天の国の命の種が蒔かれている者です。

神様の前に遜り(へりくだり)、互いに尊び合い、福音の為に一つとなって、天の国への道をませて下さい。

救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。

アーメン。